

空間轉換時間的多義性網絡 —以「中」與「間」的意義分析為對象—

空間から時間へが多義ネットワーク—「中」と「間」の意味分析をめぐって—
The Ambiguity of Space and Time Transition—An Analysis of the Meanings of "中" (In) and "間" (Between)—

洪雅琪助理教授

洪雅琪助理教授

Hung, Ya-Chi Assistant Professor

明道大學應用日語學系

明道大学応用日本語学科

Department of the Applied Japanese, Mingdao University

筆者在教授初級日語時，經常聽到有關表示事物的位置用法如「本の中」和「本の間」等的詞彙，然而先行研究中，有關於「～の中」與「～の間」的實際使用情形的論文卻是顯少未見。

因此，本論文將針對作為日語類義表現中的一環「～の中」和「～の間」兩者之間，探究其意義分析方面有何異同，並採以語料庫分析方法，從認知語言學的觀點切入進行研究。再者，不單是表示位置的意思而已，例如像「短い時間の中」「何秒かの間」之類的時間用法也經常可見，本文也將從構句的多義性 (Polysemy) 角度考察分析。最終目的，希藉本研究對於「～の中」和「～の間」的意義分析之探討，期盼能清楚確立兩者的使用差異並掌握其全貌。

關鍵字：認知語言學、原型理論、類義表現、意思的擴張、多義性

When I was teaching basic Japanese, I often heard "本の中 (in the book)" and "本の間 (between the book)" being used to describe an object's position, but there seems to be little precedent research on the actual usage situation in "～の中" (in) and "～の間" (between).

This thesis will focus on the differences and similarities between the meanings of "～の中" (in) and "～の間" (between) and conduct a more in-depth discussion and research from the perspective of cognitive linguistics. Furthermore, this thesis is about the usage to describe not only positions but also time such as "短い時間の中 (in a short time)" and "何秒かの間 (for a few seconds)," whereby an investigation and analysis will be performed from the perspective of polysemy in sentence construction.

Keywords: Cognitive Linguistics, Prototype Theory, Synonyms, Expansion of Meaning, Polysemy

初級日本語を教える際、物事の位置を表す「本の中」や「本の間」などの表現が屢々耳にしたことがあるが、管見では「～の中」と「～の間」における実際的な使用状況に関してあまり先行研究が見られないようである。

このように、日本語の類義表現の一環である「～の中」及び「～の間」という二者の意味分析には一体どのような異同が見られるのかについて、本稿ではコーパスを利用して、認知言語学的な観点から分析してみたいものである。更に、位置を示すものだけでなく、「短い時間の中」「何秒かの間」などのような時間的用法も常に使われることから、構文的意味の多義性 (Polysemy) に関しても考察してみたい。最終的に、本研究における意味分析によって、「～の中」と「～の間」との全般的な使い分けを究明することが期待される。

キーワード：認知言語学、プロトタイプ、類義表現、意味拡張、多義性

1. はじめに

基礎日本語の文法の授業では、初級レベルによく見られる位置や時間を示す「Nの中」と「Nの間」というセンテンスについて生徒たちに説明する際、それぞれの全般的な使い分けを把握するような研究がないようなことに気が付いた。

我々の日常生活の中で常に使用される空間的・時間的な概念を表す「中」と「間」の両者は、一体どんな場合に「中」のみ用いられるのか。また「間」しか使えないのはどんな状況を指すのか。更に両者の中に共通するプロトタイプの意味¹はどんな制約が見られるのか。認知言語学²的な観点から「Nの中」

1. 吉村 (2004 : 30) によると、カテゴリーの中の代表的な事例 (= 成員) をプロトタイプ (prototype) と言う。それは、カテゴリーを代表する好例であり、分かりやすい例でもあると説明される。
2. 中村 (2004 : 250) によれば、「認知言語学は、人間の一般的認知能力と言語構造の相関を、イメージ・スキーマ、概念化、メタファー、プロトタイプ、カテゴリー化といった概念を用いて分析、説明していく学問分野である... 後略」と述べられる。



と「Nの間」における意味分析を通して、以上の課題を究明するのが本研究のねらいである。

一方、時間的な用例から見れば、物事の事態や状態を示す「(15秒という)短い時間の中」と時間的な範囲を表す「何秒かの間」などの時間的用法についても興味深い所なのである。両者とも時間的にごく短いことの意味を示しているが、「間」の場合は「短い間」や「少しの間」という表現が用いられ、「□短い時間の間」という表現の容認度が低くなってしまうのに対して、「中」の場合は「毎日の中」や「一定期間の中」などのような語彙がよく見られるが、「*何秒かの中」という用例は殆ど見つからない³。

以上のことから、本稿では認知言語学の見地から構文的意味の多義性 (polysemy)⁴ という理論を援用し、「Nの中」と「Nの間」のそれぞれの全般的な使い分けを究明することが期待される。

2. 先行研究

2.1 従来の指示的用法

「コ・ソ・ア」指示的用法に関わる参考文献は今まで数多く研究されてきたが、位置や時間を表す「～の中」と「～の間」の先行研究は管見の限り殆どない⁵。宝島・今仁 (2012) の論文は、会話の場合から「中 (なか、ちゅう、じゅう)」及び「間 (あいだ、ま、かん)」が使用される際の、話者の意図により想定されている状況について検討したものである。その研究において、「中」が空間的に使用される文脈における 1 次元、2 次元、3 次元のそれぞれの空間から分析し、「間」

3. 日本語の検索エンジンの Google (<https://www.google.co.jp>, 2016/11/19 より) 及び「現代日本語書き言葉均衡コーパス (中納言)」で考察した結果、一つの例も見つからなかった。

4. 吉村 (2004: 96) において、一つの言語形式が関連する二つ以上の意味をもつことを多義性 (polysemy) と呼び、言語形式の単位が語のときは多義語 (polyseme)、構文のときは構文的多義 (constructional polysemy) ということが載せられる。

5. ここ数十年の研究の中で、「中」と「間」に関する日本語の参考文献は宝島・今仁 (2012) のみである。

の空間的用法で特に 2 次元空間が最も見慣れたものとして観察したのである。しかし、点集合を基盤とする図形的認識の概念により、トポロジー (topology; 位相) 的な観点から論及されてきたが、「Nの中 (なか)」と「Nの間 (あいだ)」の用法における実際的な使用状況にどのような意味的な分布が見られるのかについては触れていない。一方、類義表現に関する辞典の中では、徳川宗賢・宮島達夫 (1972) 『類義語辞典』、森田良行 (1994) 『基礎日本語辞典』、柴田武・山田進 (2003) 『類語大辞典』など⁶ は一部の「中 (なか)」と「間 (あいだ)」を対象に各自の主な使い分けについて言及したものにすぎない。更に、認知言語学的な観点から、多くの構文においてよく見られるプロトタイプから周辺事例への意味拡張⁷ はどのように働くのかに関しても未だに究明されていない。そこで、本稿では「Nの中」と「Nの間」におけるそれぞれの使い分け、意味拡張の認知プロセス及び使用実態について解明してみたい。

2.2 認知意味論から見たスキーマと多義

認知意味論における「意味」について、「人間を、意味を読みとり意味を発信する主体とみなし、人間の身体性、すなわち種々の感覚・知覚・認知の営みの総合的現れが意味である」⁸ と考えられる。要するに、外部世界を解釈する主体は人間であり、その解釈は身体性と環境との相互作用によって意味付けられる。⁹

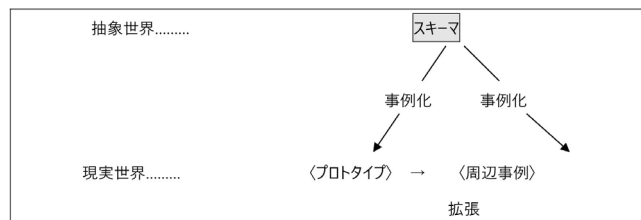
吉村 (2004: 49) は、スキーマはプロトタイプと周辺事例 (peripheral example) に共通した抽象的なイメージを概略化して表すもので、プロトタイプから様々な周辺事例までの意味ネットワークはある意味のカテゴリーに属するとし、図 1 のように示した。

7. 『国語大辞典』によれば、「意味変化には三つの型が指摘できる。拡大と縮小と交替とである。拡大とはもとの意味が行われているときに、それと並んで、別の意味が広まる場合である。」と記述される。

8. 辻 (2002: 176) による。

9. 前掲書。吉村 (2004: 17-18) を参照されたい。





↑ 図1 スキーマと事例化

位置を表す「Nの中」の例を挙げると、「空間的に仕切られたものの内部」はプロトタイプの意味と見なし、「ものの内部や内側」という意味を持たないが、同じく「Nの中」のカテゴリーに属する「物事が進行している最中」¹⁰の意味を示す「Nの中」は本来の意味から拡張した周辺事例である。また、「中」のように、一つの言語形式において「二つの物事のあいだ／物の奥深いところ／限られた範囲に含まれる部分／三人兄弟の2番目／物事が進行している最中」などのような二つ以上の意味を持つことがあるというのは多義性 (polysemy) と呼ぶ。

2.3 メタファー・メトニミー・シネクドキ

語彙の多義性を解明するには、メタファー (隠喩; metaphor) ・メトニミー (換喩; metonymy) ・シネクドキー (提喩; synecdoche) という三つの比喩構造が欠かせないものだと考えられる。本研究では、「Nの中」と「Nの間」についてその3種の比喩構造を対象に考察を進める。

3. 考察対象と研究方法

今回の調査では紙幅の関係、「Nの中 (なか)」と「Nの間 (あいだ)」のような表現を国立言語研究所のコーパス

10. 『大辞泉』における「中 (なか)」の意味について「物事が進行している最中。また、ある状態が続いているとき。」と書かれてあり、それらの例文として「あらしのーを突き進む」「お忙しいーをありがとうございます」が挙げられる。

「KOTONOHA」¹¹から抽出し、考察対象とする。また、「N + 中 (ちゅう・じゅう)」や「Nの間 (ま)」 「数量名詞 + 間 (かん)」 などのような慣用的用法は除外する¹²。なお、構文の容認度に関して便宜上、日本語の検索エンジン Google なども補充的に用いることにする。

更に、プロトタイプの確立は言葉の普遍性に関わると考えられる¹³ことから、「中」と「間」におけるそれぞれのカテゴリーに属するプロトタイプを見出さなければならない。つまり、語彙的研究から見ればそれらの基本義¹⁴を考察してみよう。まず、表1のように『広辞苑』、『大辞林』、『明鏡国語辞典』、『新明解国語辞典』、『角川類語新辞典』、『旺文社全訳古語辞典』といった六つの辞典に掲載されている「中 (なか)」と「間 (あいだ)」のそれぞれの基本義を見られたい。

↓ 表1 各辞典における「中」と「間」の基本義

辞典名	「中 (なか)」	「間 (あいだ)」
広辞苑 (第六版)	一定の区画・範囲の内。「外」に対する。	二つのものに挟まれた部分。物と物とに挟まれた空間・部分。
大辞林 (第三版)	㊦ 空間的な、ある範囲の内側。 ㊧ 家庭・学校・会社など、ある組織や集団の内部。	二つのものにはさまれた、あいている部分。中間。
明鏡国語辞典 (第二版)	空間的に仕切られたものの内側や内部。特に、その中心部。中央。	空間的に、二つのものに挟まれて空いている部分。また、基準となる二つのものを結ぶ部分。
新明解国語辞典 (第七版)	何かの仕切りで取り囲まれた所。内 (ウチ)。	直接続かない二つの点 (物) の非連続部分に存在する空間・時間など。
角川類語新辞典 (デジタル版)	内部。もの枠の中の部分。 (注) 古くは、上・中・下の区別あるものの上でも下でもない所の意。それが空間的に前後・左右のいずれでもない所、内の意味に近づいた。	物と物とに挟まれた部分
旺文社全訳古語辞典 (第四版)	内部。うち。	現代(あいだ)→あひだ 空間的に二つのもの間。中間。すさま。

11. 本稿で採集した例文については、各辞典からの出所の他に「現代日本語書き言葉均衡コーパス」検索デモンストレーション (<http://www.kotonoha.gr.jp/demo>) を参照されたい。
12. 「Nの中」の場合、例えば「世の中」のような慣用的用法及び「この中から」「その中で」などの「指示詞コ・ソ+の中」という文は対象外とする。一方、「Nの間」の場合から見れば、「東の間」「いつの間にか」のような慣用的用法、固有名詞の「茶の間」、または「この間も」「その間に」などの指示的な文も排除する。本稿では「Nの中」が347例と「Nの間」が272例で合計619例を集めた。
13. プロトタイプの設定について、趙 (2007) 「共時的な多義ネットワークの試案 — 日中同形語植物表現を中心に —」が参考になった。
14. 一般的に言えば、各辞書に載せられる語の第一義はその基本的な意味であり、認知意味論でのプロトタイプ的な意味だと見なされる。



上表から分かるように、「中」の基本義は「外」に対する空間的に仕切られたものの内側や内部というのだが、「中」の本来の原義は「上・中・下の枠で上でも下でもない所を意味し、それが空間的に前後・左右のいずれでもない所、「内（うち）」¹⁵の意味に近づいた（下線筆者）」と書かれてある。一方、「間」の基本義は主として「空間的に二つのものに挟まれた部分（下線筆者）」と記述されている。以上のことから、本稿では「中（なか）」と「間（あいだ）」の基本義について表2のように定義されている。これらは各自のカテゴリーに属するプロトタイプと見なすことができよう。

↓表2 「中」と「間」のプロトタイプ

	プロトタイプ	用例
「中」	空間的に前後・左右のいずれでもない所、内側や内部の意味	建物の中に入る、中までよく火を通す、財布の中が空になる
「間」	空間的に二つの物に挟まれた部分を指す意味	雲の間から日がさす、東京と横浜の間を走る電車

なお、「中」と「間」のプロトタイプ的な基本義によるプロセスを図4のように示す。それぞれは太い破線でマークされる部分によってプロファイルされた段階を指すものである。



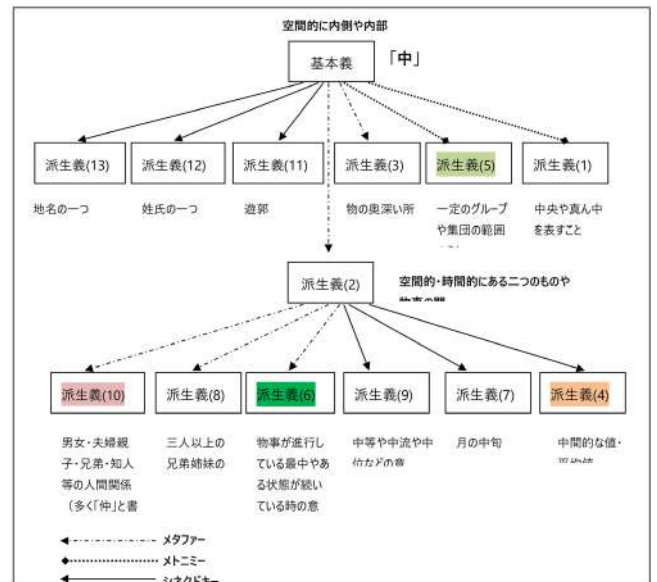
↑図2 「中」と「間」のプロトタイプ的な概念図

4. 「中」に対する意味分析

4.1 「中」の多義ネットワーク¹⁶

15. 『使い方の分かる類語例解辞典』（小学館、2003）によれば、「内」は、ある一定の範囲であること。「今月の内に休暇を取る」「五千円より内」のように、ある時間や程度、分量などが範囲内であることを表すこともある。また、「中」は空間的に限られた物に対して用いられることが多く、「内」のように、時間や程度、分量などに対して使われることは少ないと指摘されている。
16. 本稿の分析方法については頼（2009）「日中両国語の数字による慣用語の一考察 —「一」「二」「三」を中心に— 研究」が参考になった。

基本義およびその基本義から派生された多義的な意味の関連を明示するためには、それぞれの異なる意味記述をまとめる必要があると考える。Langacker（1991）によると、「認知文法では概略化（schematization）と拡張（extension）というカテゴリー化関係によって節点（node）がリンクされるような構造を持つ、カテゴリー化のモデルを「ネットワーク・モデル」と呼ぶ¹⁷。本節では、「中」の基本義とそれから展開される様々な派生義との間に、どのような多義ネットワークを見せているか、に関して図3のように示すことができる。



↑図3 「中」における多義ネットワーク図

図3では、まず「中」の基本義をもとに、意味拡張を生じさせるプロセスである比喻の重要な概念としてのメタファー・メトニミー・シネクドキーのいずれかの下位類によって放射状の多義ネットワークが構成されている。基本義から派生義（1）、（5）まで拡張されるのでは、メトニミーの「全体で部分を表す」の隣接関係が見られる。そして、基本義から派生義（2）、（3）まで拡張されるのは、メタファーの「位置の類似性（機能類似）」及び「特徴・特性の類似性（特性類似）」に関連付けられている。更に、派生義（2）においては、物理的な空間領域からよ

17. 辻（2002：195）からの再引用。



り抽象的で捉えにくい時間的・心理的領域へと隠喩的写像がなされることによって派生義(6)、(10)と位置の類似性による機能類似に基づく派生義(8)まで意味拡張されているのに対して、派生義(4)、(7)、(9)のそれぞれまで拡張されるのは提喩の特殊化(specialization)現象が強調されているからであろう。なお、基本義から派生義(11)、(12)、(13)まで拡張されるのも、シネクドキーとしての「類から種へ拡張される特殊化(specialization)現象」が見られる。

4.2 時間を表す「Nの中」の表現について

ここでは紙幅の関係、特に時間を表す「Nの中」の使用実態に焦点を絞って考察してみる。「KOTONOHA」のコーパスから採集した「Nの中」に関する347例から見ると、わずか5例(1.44%)しかなく十位となった。大抵、非常に短い時間を表すものとそうでないものという2種類に分けることができる。例えば、例1.2の「短い時間の中」が示すように、15秒などごく短い時間を表すものである。一方、例3—5の「毎日の中」「一定期間の中」「約25分の中」などのように、ある時間的な範囲内の期間を表すものもあり得る。つまり、前述した派生義(2)の例に相当するものである。

例1. 伝えたいことを正しく相手に伝えるために工夫する。ねらい15秒という短い時間の中で、相手に伝えたい情報を精査していくコミュニケーション力を学びます。

(森田弘行(著)『小五教育技術』、2005)

例2. こうしたい! こうしたい! という想いがすごく強かったもので、まさるさんには短い時間の中で無理ばかり言ってしまうりましたが、頭に描いていた希望通りのものをすごく素敵に作ってくださいました。まさるさ〜ん! どうもありがとうございました。(* ^ _

^ *)。にこっ♪ 音楽で

(Yahoo! ブログ、2008)

例3. この方とお話してみたいなと思った方には、メールを返し、お話をしたりその後、お断りする場合もなるべく自分の言葉でお返事してきました。そんな毎日の中で気が付いたことがあります。全ての方がそうではないと思うのですが、プチメールを送ってくる方は、メールが続かない事が多いのです。

例4. 春に原油暴騰のとき、7月原油バブルははじけて、天井を付ける、と言っていたプロ筋はここで金融危機を一定期間の中で乗り越え、米国も日本も復活に向けた準備に入る、との見方をしているのだという。

(Yahoo! ブログ、2008)

例5. 泉質●弱アルカリ性単純泉 交通●JR篠ノ井線松本駅から浅間温泉行きバス約25分の中浅間下車、徒歩1分
(交通新聞社『旅の手帖』、2005)

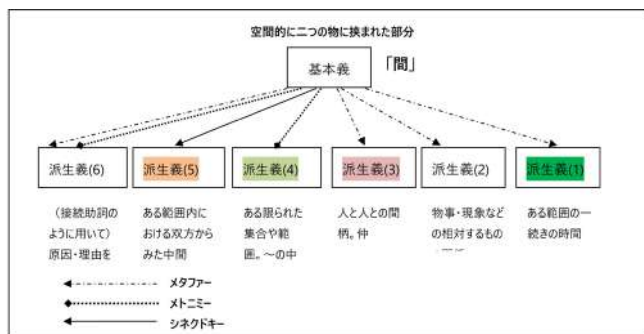
5. 「間」に対する意味分析

5.1 「間」の多義ネットワーク

上述の4.1と同じ分析方法を用いて「間」の多義ネットワークについて全般的に解明を試みる。「間」の基本義は「空間的に二つの物に挟まれた部分」であって、各派生義までの意味拡張のプロセスについては図4のように示すことができる。まず「間」の基本義から派生義(1)、(2)、(3)のそれぞれまで拡張されるのは、物理的な空間領域からより抽象的で捉えにくい時間領域・社会領域・心理領域へ意味づけられ、つまりメタファー表現が使われるということであろう。また、基本義から派生義(4)までの意味拡張のプロセスでは、物理的な三人以上の集合体がプ



ロファイルされ、「部分で全体を表す」というメトニミー表現が見られる。一方、基本義から派生義(5)までの認知過程では、〈類〉から〈種〉への「特殊化(specialization)」の現象が取り上げられる。最後に、基本義から派生義(6)までの意味拡張においては、本来の空間的な領域の概念(空間接置詞≒名詞)から「文法化(grammaticalization)」を介して「～ので・ゆえに」という理由を表す機能語(接続助詞)へと変化させたものが見られる。



↑図4「間」における多義ネットワーク図

以上の分析から、表3で見ると、図3は図4に比べると、「中(なか)」の派生義(4)(5)(6)(10)は「間(あいだ)」の派生義(5)(4)(1)(3)にほぼ同じような働きをするのが観察できる。「中(なか)」と「間(あいだ)」では、プロトタイプから周辺事例への意味拡張のプロセスはその四つの派生義を除いて、各自の派生義が独立し、違う表現が用いられることが分かった。

↓表3「中」と「間」から見た共通的な表現

比喻構造	派生義	「中(なか)」の例文	「間(あいだ)」の例文
シネクデー	(4) 中間的な値・平均値	「測定値の中を取る」	「間をとって三万円にしよう」 ¹⁸
メトニミー	(5) 一定のグループや集団の範囲のうち	「人込みの中を急ぐ」「仲間の中でいちばん若い」「予算の中でまかなう」 ¹⁹	「若者の間で評判の歌手」「研究者の間では常識だ」 ²⁰
メタファー	(6) 物事が進行している最中やある状態が続いている時の意	「お忙しい中をありがとうございます」 ²¹ 、「雨の中を傘も持たずに飛び出す」 ²²	「眠っている間に雨はやんでいた」 ²³ 、「しばらくの間様子を見よう」 ²⁴
メタファー	(10) 男女・夫婦・親子・兄弟・知人等の人間関係	「中を裂く」 ²⁵	「夫婦の間がうまくいかない」「労資の間をとりもつ」 ²⁶

18. 『大辞泉』(松村、2012)による。

19. 同上。

20. 『明鏡国語辞典』(北原、2010)による。

21. 前掲書。

22. 『明鏡国語辞典』(北原、2010)では「物事が起こっている、その状況下」と解釈されている。

23. 『大辞泉』(松村、2012)による。

24. 同上。

25. 『広辞苑』(新村、2008)を参照。

26. 前掲書。

5.2 時間を表す「Nの間」の表現について

4.2で述べたように、紙幅の関係で時間を表す「Nの間」の実際的な使用をめぐって考察を進めてみる。コーパスから採集した「Nの間」に関する272例のうち、約三割以上(32.35%)を占め、その使用頻度が一位となって88例もあることが分かった。大体一定の期間を表すもので、その前に「～から～まで」という副詞を伴って多用されているが、上述の派生義(1)に相当するものが数多く見られる。

例6. 公表した金額は、年度終了後(4月1日)から出納閉鎖(5月31日)までの間にもお金の出し入れがあるため、決算とは異なります。
(「広報南アルプス」 山梨県南アルプス市、2008)

例7. 抽選の上、当選された方のみ、6/27(金)19:00~21:00の間に折り返しファンクラブよりお電話させていただきます。

(Yahoo! ブログ、2008)

例8. 今後三、四カ月の間に余震が続き、震度5クラスの地震が発生する可能性がある。
(中日新聞社(著)「中日新聞」、2004)

また、「現在」や「暫し」という短い時間を表すものとして、「今の間」「ほんの少しの間」「少しの間」などの例が挙げられる。例9—11のように、いずれもその後に助詞の「に」や「だけ」或いは「、」という句読点を用いられ、現時点を強調する役目を果たしていることが明らかになった。

例9. この先、お子さんができ大きくなるにつれて必要な生活費がいるようになるので今の間にどんどん貯金を増やしておいた方がいいですね☆



(Yahoo! ブログ、2005)

例 10. 大切にかけがえの無いもののはずだから……。この花の様に、ほんの少しの間だけ、綺麗に輝いて咲いていたい。風に揺られて、一瞬を精一杯生きて居たい……

(Yahoo! ブログ、2008)

例 11. 利用者は、季節の衣類や使わない日用品、仕事で使うサンプルなど、さまざまなモノを収納している。引っ越しなどで行き場のない荷物を少しの間、預ける人もいるらしい。実際に館内に入ると、内装の明るさに驚く。受付から収納ユニットの並ぶフロアまで、白を基調にした内装は清潔感があり、薄暗い倉庫のような印象は全くない。

(川上ユキ(著)「産業経済新聞」、2005)

続いて、同じく「ちょっとの間」ないしは「近い将来」を示す表現として、その他にも「しばらくの間」や「当分の間」などの用法が見られ、例 12—13 のようである。コーパスにおける実際の使用頻度からも分かるように、「しばらくの間」>「当分の間」>「少しの間」>「ほんの少しの間」>「今の間」のような順位となった。

例 12. しばらくの間、姉とは目を合わせられなくなるのも、結局のところ、私の望んだことだった。七月二十九日 日溜まりを見つめて午前中を過ごした。

(辻仁成(著)『文學界』文藝春秋、2001)

例 13. 銀行に行かなくても良いわけですから便利です。当分の間は申告は今まで通りで、納付は e □ T A X を利用というパターンが多くなるように思います。

(Yahoo! 知恵袋、2005)

一方、「Nの間」の表現の中では、数詞と組み合わせるものとして程度副詞の「ほど」(113件)、「くらい」(64件)「ぐらい」(59件)、「以上」(38件)などの用法が屢々使われる。いずれも時間的・空間的・数量的な度合ないしは物事の程度を示すものばかりである。

例 14. 1時間ほどの間に鍵のかけてある自転車を盗まれました。後輪にかけるリング状の鍵です。

(Yahoo! 知恵袋、2005)

例 15. 釣った魚を撮った写真の光の加減で、「つるべ落とし」と言われる冬の夕暮れの早さがわかると思います。1時間くらいの間にドンドン景色が影っていくのがわかります。ああ～冬だねえ～。

(Yahoo! ブログ、2008)

例 16. このうち、東海地震の震源域では、1854年に発生した安政の東海地震以来、150年以上の間、大きな地震が発生していません。

(「広報いせ」三重県伊勢市、2008)

例 17. ここでこの男の口を封じたとして、死体の始末は脅迫者に頼めるか？何秒かの間、烏丸は男の目を見て真剣に検討したが、答が出る前に男の顔から笑みが消え、「そりゃ、本部を通さないで仕事したってバレたら、わたしだって困りますから…。

(池上正樹・福井晴敏(著)『週刊文春』文藝春秋、2003)

例 18. バイクを扱ったスポットの番組も案外あるのに気づいた。何年もの間、ごく一部のテレビ局しか映らないような環境にいたので、決まったものしか見てなかった。

(実著者不明 『モーターサイクリスト ランプラス』八重洲出版、2003)



更に、例 17—18 における「何秒かの間」「何年もの間」などのように、それらの殆どが「～の中」を入れ替えることができない場合があると分かった。ここで興味深いことに、【定】を表す「明確な数詞+時間的単位+の～」の場合は「Nの中」と「Nの間」の二者の構文とも使用されているのに対して、【不定】を表す「何+か/も+時間的単位+の～」ないしは「数(すう)+時間的単位+の～」の場合は「Nの間」構文のみが使われるようになり、「Nの中」構文の容認度が低くなっていくことが明らかになった。このことを表 4 のようにまとめることができる。

↓表 4 数の【定・不定】による「Nの中」と「Nの間」構文の使用状況

方位詞の構文 数の定・不定	「Nの中」	「Nの間」
【定】 「数詞+時間的単位」の～ Ex. ～ヶ月の中、～分の間など	○	○
【不定】 「何+か/も+時間的単位」の～ 「数(すう)+時間的単位」の～ Ex. 何年もの間、何秒かの間、数時間の間など	× ²⁹	○

6. 終わりに

以上の考察結果からも分かるように、本研究では認知言語学の観点から「Nの中」と「Nの間」という表現の全般的な使い分け及びプロトタイプとその意味拡張のプロセスが明らかになった。なお、本稿では紙幅の関係、実際的な使用状況における時間的用法のみを取り上げて「Nの中」と「Nの間」の二つの構文について探究してきたが、他の意味的な分布に関しては続きの論文にゆずりたい。

〔注記〕本稿は「2016 明道大学応用日本語学科言語及び文化学術シンポジウム」(2016 年 12 月 17 日、明道大学にて)における口頭発表の内容に加筆修正を施し、まとめ直したものである。席上、多くの方々よりご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

29. コーパスで調べた結果、「数(すう)+時間的単位+の中」という構文において、「数年の中」(1 件のみ)の他に、殆どが使われていないことが分かった。

参考文献

- 黄淑燕(2010)、『日語類義表現』、台北市：鴻儒堂出版社
- ジョージ・レイコフ著、池上嘉彦・河上誓作他訳(1987)、『認知意味論—言語から見た人間の心—』、東京都：紀伊国屋書店
- 杉本孝司(1998)、『意味論 2—認知意味論—』、東京都：くろしお出版
- 趙順文(2007)、「共時的な多義ネットワークの試案—日中同形語植物表現を中心に—」、『台湾日本語文学報』、第 22 号
- 辻幸夫編(2002)、『認知言語学キーワード事典』、東京都：研究社
- 中村芳久編(2004)、『シリーズ認知言語学入門〈第 5 巻〉認知文法論Ⅱ』、東京都：大修館書店
- 宝島格・今仁生美(2012 / 03)、「話者の想定から見た「中」と「間」の空間的および時間的用法」、『名古屋学院大学論集 言葉・文化篇』、第 23 巻第 2 号
- 山梨正明(2004)、『ことばの認知空間』、東京都：開拓社
- 吉村公宏(2004)、『はじめての認知言語学』、東京都：研究社
- 頼素珍(2009)、「日中両国語の数字による慣用句の一考察—「一」「二」「三」を中心に—研究」、東呉大学日本語学科修士論文

例文出典

- 大野晋・浜西正人(2012)、『角川類語新辞典』、角川学芸出版
- 国語学会編(1980)、『国語学大辞典』、東京堂出版
- 柴田武・山田進編(2003)、『類語大辞典』



(4刷)、講談社

新村出編(2008)、『広辞苑』第六版、岩波書店

小学館辞典編集部(2003)、『使い方の分かる類語例解辞典』、小学館

徳川宗賢・宮島達夫編(1972)、『類義語辞典』、東京堂出版

北原保雄編(2010)、『明鏡国語辞典』第二版、大修館書店

松村明編(2006)、『大辞林』第三版、三省堂

松村明監修(2012)、『大辞泉』増補・新装版、小学館

宮腰賢他編(2011)、『旺文社全訳古語辞典』第四版、旺文社

森田良行(1994)、『基礎日本語辞典』、鴻儒堂出版社

山田忠雄他編(2011)、『新明解国語辞典』第七版、三省堂

コーパス

KOTONOHA「現代日本語書き言葉均衡コーパス(中納言)」

